

Kawasaki 美術館
金山平三の世界



《雨のプラス・ピガール》 1915（大正4）年 60.1×72.1cm 油彩・布 兵庫県立美術館蔵

ヨーロッパ留学中に描いた 雨に濡れるパリの広場

金山は一九二二（明治四十五年）年から約四年間、ヨーロッパに私費留学した。フランスを中心にヨーロッパ中をくまなく巡り、多くの作品を手がけるとともに本場の油彩絵具の研究にも余念がなかった。金山の作品が年を経ても色あせないのは、この頃の経験による。

今でこそパリの歓楽街として有名なピガール広場（プラス・ピガール）だが、モンマルトルにほど近いこともあってか、金山は留学最終年の一九一五年に、この広場に面したマキス・オテルに宿泊していたとされ、本作はその頃に描かれたものである。ほぼ同じ構図の習作と、好天時の情景をとらえた《昼のプラス・ピガール》という作品も存在する。同じ場所の異なる時間帯をさまざまに表現したクロード・モネをほうふつとさせる姿勢だが、気候の違いを主眼において描き分けるのは、湿度や水面の表現に終生取り組んだ金山ならではのといえる。印象派風の点描によって、雨に濡れる路面や建物、クリシー大通りを行き交う車や人が的確にとらえられる一方で、鮮やかな緑で表現された噴水周りの円形の植栽は、いくぶん幾何学的な要素として、叙情的な画面の中で構築性を際立たせている。

（兵庫県立美術館学芸員
相良周作）



金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年（明治16年）神戸に生まれ、1964年（昭和39年）80歳で生涯を終えました。1909年（明治42年）東京美術学校（現在の東京芸術大学）を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年（大正5年）には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館（現・兵庫県立美術館）にすべて寄贈しました。